

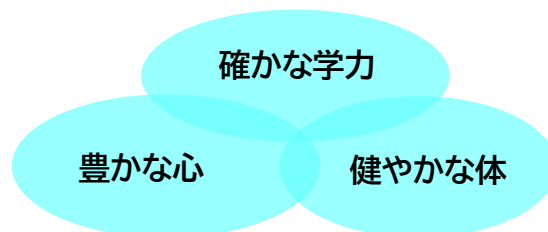
3 生きる力

1 生きる力とは

21 世紀は、「知識基盤社会の時代」とも言われ、情報化やグローバル化等社会的変化が人間の予測を超えて、より加速度的に進展している。また、人工知能（A I）等の先端技術が高度化した Society5.0 時代が到来しつつあり、社会の在り方そのものが、劇的に変わる状況が生じつつある。

このような「複雑で予測困難な時代」においては、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に関わり合い、多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となることができる力が、求められている。

このために必要となるのは、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」からなる、「生きる力」である。これらは学校教育を通じて、相互に関連し合いながら一体的な実現を図ることが大切である。



相互に関連し合いながら一体的に育む学校教育を

2 生きる力を育むために

(1) 主体的・対話的で深い学びの実現

－「何を学ぶか」「どのように学ぶか」－

- ・ 一つ一つの知識がつながり、「分かった!」「面白い!」と思える授業にする。
- ・ 見通しをもって、粘り強く取り組む力が身に付く授業にする。
- ・ 周りの人たちと共に考え、学び、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業にする。
- ・ 自分の学びを振り返り、次の学びや生活に生かす力を育む授業にする。

(2) カリキュラム・マネジメントの確立

－教育活動の質の向上、学習効果の最大化－

- ・ 学校教育の効果を常に検証して改善する。
- ・ 教師が協働し、複数の教科等の連携を図りながら授業をつくる。
- ・ 地域と連携し、よりよい学校教育を目指す。

質の高い学び

学んだことを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性等の涵養

実際の社会や生活で生きて働く
知識及び技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力、判断力、表現力等の育成

【「生きる力」の育成を目指す資質・能力】

一人一人の子供が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要である。

確かな学力

「生きる力」を「知」の側面から捉えたものが「確かな学力」である。習得した基礎的・基本的な知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めることが重要である。

また、確かな学力は、単元や題材等の内容や時間のまとまりを見通した、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、育成が図られるものである。しかし、これまでと全く異なる指導方法を導入する必要はなく、これまでの教育実践の蓄積を確実に引き継ぎつつ、授業を工夫・改善することが大切である。

○ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善をしよう

主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現させ、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができる子供の育成を目指す。

そのためには、学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」の実現が必要である。また、子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」の実現が必要である。

そして、習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えをもとに創造したりすることに向かう「深い学び」を実現していく。

「令和の日本型学校教育」における「子供の学び」の姿

—「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善・学習改善につなげることで、子供の資質・能力の育成を図る—

◆「個別最適な学び」は、「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されている。

「指導の個別化」：子供一人一人の特性・学習進度・学習到達度等に応じ、教師は必要に応じた重点的な指導や指導方法・教材等の工夫を行うことにより、一定の目標を全ての子供が達成することを目指し、異なる方法等で学習を進める。

「学習の個性化」：子供一人一人の興味・関心・キャリア形成の方向性に応じ、教師は一人一人に応じた学習活動や課題に取り組む機会の提供を行うことにより、異なる目標に向けて、学習を深め、広げる。

◆「協働的な学び」は、子供一人一人のよい点や可能性を生かし、子供同士、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働することにより、異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出すことである。

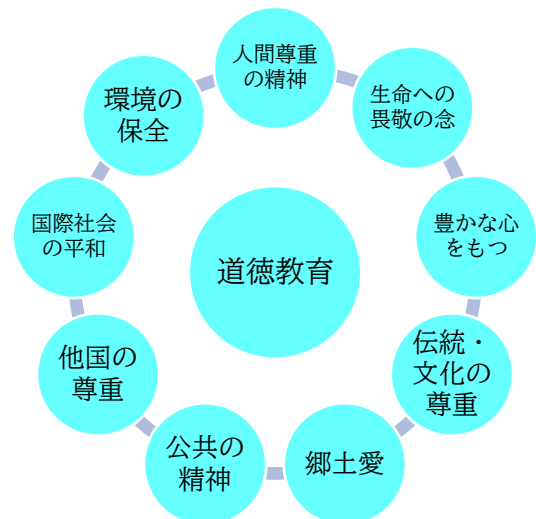
求められる教職員の姿

- ・ 環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続けている。
- ・ 子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている。
- ・ 子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている。

豊かな心

「生きる力」を「徳＝心」の側面から捉えたものが「豊かな心」である。昨今、家庭等による教育力が低下し、生活習慣の確立が不十分であったり、情報環境等が劇的に変化し、大人や異年齢の子供との交流の場や、自然と関わる体験等が減少したりしている。このような中、自信がもてず、人間関係をうまくつくることができなったり、自分の将来に不安を感じたりする子供が増加している。

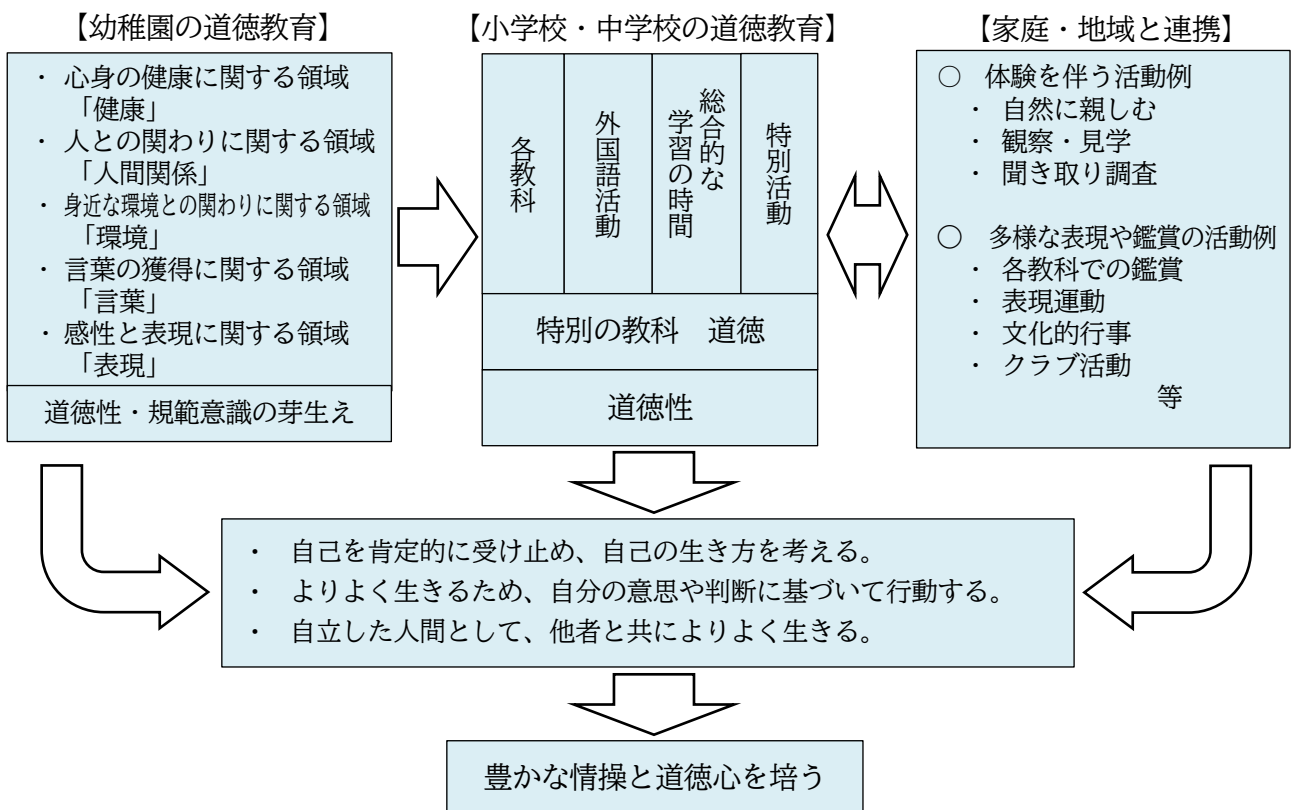
未来を拓く主体性のある子供の育成のためには、道徳教育や体験活動、多様な表現や鑑賞の活動を通して、「豊かな心」を育むことが大切である。



【要となる道徳教育の留意点】

○ 子供の心に響く道徳教育や豊かな体験活動や表現・鑑賞の活動を推進しよう

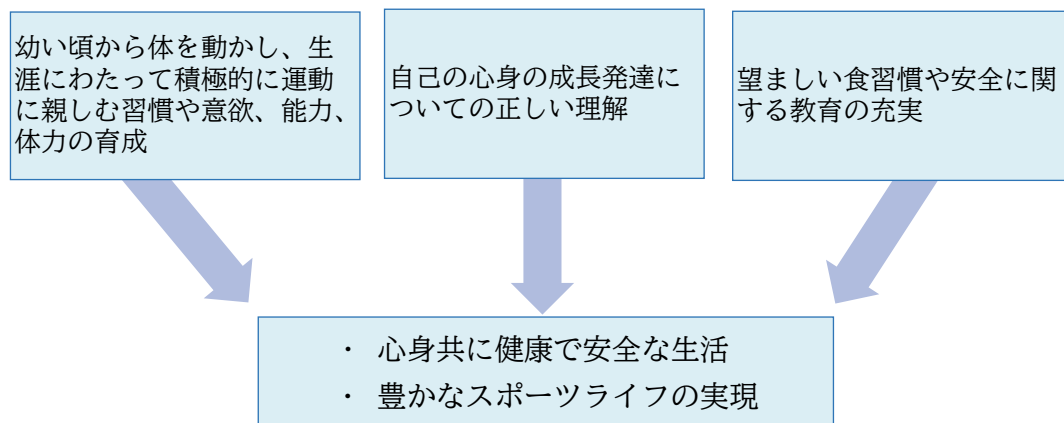
子供が、生命の有限性や自然の大切さ、主体的に挑戦することや多様な他者と協働することの重要性等を実感しながら理解することや、規範意識等を身に付けることが重要である。幼稚園・学校教育の場を生かして、家庭や地域社会と連携しつつ、体系的・継続的に道徳教育を行うことや体験活動、表現・鑑賞の活動を実施していくことが大切である。



愛知県教育委員会道徳教育総合推進サイト「モラルBOX」（義務教育課Webサイト掲載）の実践事例を活用するなどして、道徳科はもとより、日常の道徳教育の充実を図る。

健やかな体

「生きる力」を「体」の側面から捉えたものが「健やかな体」である。体力は、人間の活動の源であり、健康の保持のほか、意欲や気力といった精神面の充実に大きく寄与する要素である。



○ 教育活動全体を通じて、安全な生活や健康の保持増進のための実践力を育成しよう

幼稚園・学校生活、家庭や地域社会において、次に挙げる健康や安全、食育を考慮し、よりよい生活を送るための基礎を培うことが大切である。

